

## 御田植神事

日本では米と宗教は密接に結びついている。日本の多くの地域では、稲作の季節は、神道の儀式に始まり、神道の儀式に終わる。田植えの儀式は、苗の成長を祈ることと、その収穫を神に感謝するものである。住吉大社の田植えの儀式である御田植神事は、日本で最もよく知られている神事の1つである。その神事は古来よりきちんと守られてきた。

御田植神事は211年に神社が創建されたときに始まったといわれている。住吉大社の創業者である神功皇后が、新しい田んぼを作って神社の神々に捧げることを命じたといわれている。彼女は、特別に訓練された「植栽の乙女」(植女)を本州西部から呼んで畑の手入れをさせた。神社の敷地の南西部にある同じ水田が、今も祭事に使われている。

御田植神事は稲の苗と、参列者のお祓から始まる。神聖な田んぼは牛車で耕し、聖水を撒く。植女が稲を植えると、色とりどりの衣装を身にまとった踊り手や音楽家が田んぼの端で踊ったり、演奏したりする。彼らのエネルギーが苗に健康と活力を与えるといわれている。

江戸時代(1603-1867)には、近隣の堺の旅人宿の女性が植女役を務めた。「遊女」と呼ばれた女性たちの多くは踊りや音楽に長けている人が多く、その中でも特に優れた人は有名人だったといわれている。御田植神事では田植えの他にも遊女の踊りが行われたため、遊女たちは芸術的才能を発揮するとともに、神事による浄化を受けることができた。(現在、植女は大阪近郊の女性アーティストが担当している。)

御田植神事は毎年6月14日に行われ、国の重要無形文化財に指定されている。